

2024年11月24日（日曜日） 13時00分～14時30分

わくわく猛禽類トーク in 鈎路

【開催挨拶・趣旨説明】

池田氏：

皆さんこんにちは。お時間になりましたので、始めたいと思います。

本日はワクワク・猛禽類トーク in 鈎路ということで、猛禽類のお話をさせていただきたいと思います。

私、札幌市円山動物園の池田と申します。今日は本当にたくさんの方々にお越しいただきまして、本当にありがとうございます。

当初 50 名ぐらいという想定で、そちらの会場用意したんですけれども、それを遥かに超えて、最初用意してなかった奥の方まで席を追加しまして、こんなにたくさんの方が来てくれるとは思いませんでした。本当にありがとうございます。

今日のイベントでは、北海道に生息しているオオワシ始めとした猛禽類の保全活動などについて、各方面の方々から分かりやすくお話ををしていただきたいと思います。

円山動物園は昭和26年に開園した当初は、3種類の動物がいました。エゾシカヒグマ、そしてオオワシです。それからずっとオオワシを飼育しておりまして、現在の9羽のオオワシを飼育しております。そういうこともあり円山動物園では、オオワシ始めとした猛禽類の保全活動というのに力を入れております。本日はその一環として、札幌を飛び出して猛禽類が多く生息している道東の地域でのイベントということで企画をさせていただきました。それでは短い時間ではございますけれども、最後までよろしくお願ひ致します。

高岡氏：

本日の司会進行を務めさせていただきます、円山動物園の高岡と申します。よろしくお願ひ致します。私は普段は飼育係をしているんですけども、今日のスタッフはみんな、3名飼育係が来ております。円山動物園、札幌市内にある円山動物園から來ました。

1番最初は、「みんなで調べたオオワシ、オオワシの生息数」と題して、オジロワシ・オオワシ合同調査グループの中川元様にオンラインでの発表をしていただきます。では、中川さん準備が出来ましたら宜しくお願ひ致します。

自己紹介・取り組み報告

1. 「みんなで調べたオオワシ・オジロワシの生息数」

オジロワシ・オオワシ合同調査グループ 中川元（オンライン）

知床の斜里町に住んでます、中川と申します。よろしくお願ひします。それでは、「みんなで調べたオオワシ・オジロワシの生息数」ということで、お話しします。

私は、オジロワシ・オオワシ合同調査グループのメンバーとして調査に参加し、またオジロワシの繁殖についてもオジロワシ長期モニタリング調査グループで皆さんと一緒に活動おります。まずその、オジロワシ・オオワシの一斉調査についてはなします。2月に一斉調査してます。一斉調査というのは、全道各地で、同じ日に一斉に北海道でワシを調べるという調査です。どうして一斉にやるかというと、真冬の時期というのは、オジロワシ、オオワシ、移動するんです。ですから、何日もかけてぐるぐる回って調査をすると、北海道全体の数はなかなか分からないので、同じ日に一斉に調査する。ただ、一斉に調査するというのは、たくさんの場所で大勢で見ないといけない。そういう調査なので、こういうグループを作つてです、みんなで一緒にやっています。最初にやつたのは 1980 年で、そこから 5 年間、道東でワシを観察したり、保護活動をやっている皆さんと一緒にスタートしました。1985 年からは全国に広がつて、全国にプラス本州の渡来地の、岩手とか、宮城なども加わつて、そして、40 年間、今年まで続けています。どうやってるかというと、双眼鏡や、望遠鏡を使ってワシの数をカウントするんです。場所を決めてみんなで分担して、ですから非常にたくさんの場所でやります。それから 2006 年からは、年に 1 回だった調査を、この冬の間、11 月から 3 月まで、毎月 1 回調査をするというのを 3 年に 1 回続けてます。これは、国のオジロワシ・オオワシ保護増殖事業という中で、この調査グループが一緒にやつているそういう調査になります。どんな場所でやつてるか。ここに色付いてます、調査地域としては、道北とか網走、海岸、内陸とか、知床斜里とか 20 か所ほどの調査地域になります。分担している調査区は、全部で 180 調査区ぐらいになります。そこで大勢で調べています。本州の調査区も入れると 240 ぐらいになります。

そして分かった事を簡単に話します。まず北海道で冬を越すオオワシの数は、最大で約 2000 羽。オジロワシは最大で 1100 羽。これ、最近、最大になつてます。本州はあまり少なくてオオワシも少ないので、オジロワシでも 10 羽から 20 羽ぐらいなので、ほとんど北海道って言つていいです。こういう調査で、数だけじゃなく、長年の数の変化も分かりました。地域による違いも分かりました。

まずこれは、毎年の 40 年間のカウントした数の表なんですが、でこぼこがあつて、分かりにくいんですけども、なんででこぼこがあるかというと、調査の日を 1 日決めてやつていますの

で、日曜にやっていますので、天気が悪い吹雪いでいる地域があったり、たくさんのワシがくる地域がそうだったら、調査しにくくて、あまり数が数えられなかったという年があったりするので、でこぼこしていますので、それはあまり気にしないで、すごくさらっと言うと、北海道中、低気圧に覆われたみたいな年なんですよね。そういうのは参考にならないんですけど、全体で流れとしてどうなったかというと、オオワシは80年代の後半すごく多かったんです。それが1回減って、そしてまた少しずつ増えてきました。そして、2000年代の初めに、1回多いんですけども、それからまた下がって、それもまた段々同じぐらい、増えて30ちょっと増えてるという感じです。この1番上がオオワシ、オジロワシ合計の数で、2番目はオオワシで3番目がオジロワシがありまして、点線ですね。

オジロワシちょっと違って、やっぱり80年代は多くて600羽ぐらいいたんですけども、これも減って、それから少しずつ増えて、それはオオワシと違って、ずっと少しずつ増え続けてきたんです。そして今、1100羽ぐらいになったということです。

地域によっても違うというのが、分かりました。下の方に説明がありますけども、80年代の後半は羅臼の海岸にすごく集中したんです。根室管内が多かったんです。それから90年代に入ると道東は、網走の湖だと、広く分散するようになりました。それから90年代半ばには、それまでは海岸とか、湖、川の流域だったんですけども、内陸部にも入ってきました。特に道東・道北とかはそうなのですが。これを表しているのが上のグラフです。

大きなブロックにわけて、下から青いのは道北、赤い所がオホーツク管内、緑が根室管内、青が釧路十勝管内、それからその上に胆振日高とか、道央だとか道南、本州が一番上にちょっと入っています。

これは割合です。割合がこの40年間の間に最初はすごく根室管内が多かったんです。根室管内が減ってきて、他の地域が増えてきたということが分かっています。オホーツク管内も増え、道北も増え、特に釧路・根室管内が、数が増えたけど、割合として増えています。これもオオワシとオジロワシの違いがあって、こちら右がオジロワシなのですが、オオワシほど大きな変化じゃない。ただやっぱり、最初は根室管内の方いて、その後で、オホーツクとか道北とか、釧路十勝、それから胆振日高とか、道央だとか道南だとかも、結構な数になってきたんです。ここは、オオワシとオジロワシの違いです。

どうしてこんな、年代によって変わったかというと、人の活動、人から供給される餌が関係しているんです。80年代の後半には羅臼になぜたくさん集まったかというと、漁業活動から餌が出てきた。羅臼は80年代の後半までスケトウダラ漁が、凄い最盛期で、ものすごい量が取れてたんです。その刺し網から外れる魚がたくさんあったので、そこにワシが集中していました。北海道全体の9割くらいが集中してたんですけども、90年代に入ってスケトウダラの漁が激減したんです。そうするとワシはどうなったかというと、例えば根室管内の風連湖とか、釧路管内の厚岸湖とか、道東や道北には湖がたくさんあるんですけども、その湖で、氷下漁というのをやっているんです。これが、90年代すごく増えてきたんです。それで羅臼の魚がなくなって、氷下漁では、網から氷下魚とかチカとかワカサギとか利用魚だけ取るんだけど、あの魚はそこに捨て

ちゅう。それにワシが集まつてくるようになりました。それから90年代の半ばぐらいからかな。90年代になるとエゾシカが集中します。特に道東とか。そこで狩猟をやったり駆除をしたりして死体がたくさん出た。死体を現場で解体して、肉は持っていくんですけども、その残りの骨とか皮を、残しちゅうというのは当時ありました。それからまた、手負いにあった鹿の死体もあつたと思います。そういう事で、鹿の死体やその解体残滓を餌をするようになって、内陸に増えてきたんです。

2000年代に入ると、観光が餌付けが始まりました。観光船とか、ホテルとかが餌やりを始めたんです。観光船は羅臼の海岸と風連湖では宿泊施設が餌やりをしたり、そういうところに集まりました。左の写真が氷下漁をやっている写真。右が餌やりをしてる観光船の周り集まってるワシです。同じ年の間で地域間の移動も分かりました。それは月に1回の調査が始まってから分かった事です。まず、初冬の時期、冬の初め、11月・12月は、結構、道内、道北、道東、それから日高なんかで、結構たくさんいて、この図は黄色いところがいる所で、赤が数がたくさんいるところ。赤の濃い、ほとんど黒近いようなもので数を示しているんですけど、どういうところにたくさんいるのかというと、あちこちに赤があるのは鮭の登る川なんですね。この時期は1番いるのが鮭の登る川の流域とか、上まで上らなくても河口に鮭が集まつたり、海岸に集まつたりしますので、海岸とか河口に、ワシが集まってる事が分かりました。それが真冬になると、1月、2月それが変わっちゃうんですよ。鮭のいた川では鮭を食べつくしますよ。1月なると鮭は登らなくなりますし。そうすると、どこにいくかというと、氷下漁をやっている湖、観光船が餌やりをしてるところとか、給餌をやってる場所。それからこの特に釧路管内なんかも結構内陸にたくさんありますよね。赤い色付いてます。エゾシカの死体のある内陸。こういった所に集まるようになりました。ですから、初冬時期よりは限られた所にかなり集中するんです。その他に少しづついる場所はもちろんあって、全道的にいるんですけども。そういうのが分かりました。冬季のワシ類の分布や集中がなぜ起きるのかというと餌なんですね。ワシの餌というのは魚とか、水鳥とか、それから漂着物なのですが、初冬の時期は、自然の餌なんです。産卵後の鮭とか、それからしけが多いので、海岸に魚が打ちあがつたり、水鳥も餌にしています。水鳥もたくさんの渡り鳥が来る時期ですから。それからこの海獣類というのは、主に打ちあがった死体です。アザラシとかトドとか。真冬、厳冬期になると、自然の餌が減っちゃうんですよ。そこに人が供給する餌がでてくる。これは、簡単に調査区で、どんな餌がある所にワシが集まつたかという、図なのですが。最初の11月・12月は、縁は鮭です。その他の魚。それからこれは自然の餌ですね、哺乳類や鳥類。そして赤いのは、人が供給する餌ということになる。だんだんそういう風に変わります。同じ年の冬季の中でも変わつてくる事が分かりました。

2つ目として知床のオジロワシの繁殖状況モニタリング調査というのを、2006年から20年間続けています。オジロワシ長期モニタリング調査グループという、斜里と羅臼に住んでる人たちでやつてます。ずっと継続してますんで、20年になります。調査内容としては、知床半島、斜里町羅臼町と標津町の北の部分が、オジロワシの繁殖地になってますのでそこの繁殖状況を調べる。つがいがいるか、いないか。繁殖が成功したかどうか、巣立ち雛が無事だったかどうかで

す。そういうのを調べています。それで分かったことまず1つは、知床のオジロワシの繁殖つがい数は、ずっと増えてきたんです。20年間で約2倍になりました。スタートした時は21つがいだったんですけども、今46つがいまで増えております。この図の下の青が、斜里側の繁殖つがい数、オレンジが羅臼側の繁殖つがい数です。どこが増えたかというのがちょっと興味深いのでここに書いてあります。図で説明しますと、ご存じですか？知床は世界遺産になってます。中央から先が世界遺産です。自然が守られてる保護区です。それ以外、中央から根元の方は、山岳部は保護区なんんですけど、オジロワシが繁殖しているのは海岸部なんですね。そういう所は保護区じゃないんですけど、そこでずいぶん増えたんです。それから多いのは、面積的には保護区になっている世界遺産エリアよりも、繁殖が多いので、どうしてかという事があるんですけども世界遺産エリアは保護されてるエリアです。この地域は、畑のそばで営巣してたり、道路公道のそばで営巣してたり、それから町の市街地の裏山で営巣してるところがあったりします。もちろん河川流域なんかの自然林の中、海岸林にも営巣して海岸の自然にも営巣してるんですけども、でもそういう人里と言っても良いような場所に出てきました。それが分かってきました。もう1つ分かったのが繁殖成功率というのも分かりました。繁殖が成功したか、失敗したかを見ています。各メンバーが分担して見てるんですけども、ただなかなか知床は奥の方もありますし、手前なんてなかなか行くのが大変なことがあったりして全部は見れないんですね。つがい数の確認をしているんですけども、繁殖の成功、失敗まで見てるのは全体の半分ぐらいです。そういうとこから出している繁殖成功率なんです。年によって違ったり、すごく悪い年があったり、気象が関係ある年なんですけれど、色々あることが分かりました。営巣木も一つがいでいつも持っているつがいもいれば夫婦で移してしまう。また十年以上同じ一つを続けて使うつがいもいるというそんなことが分かりました。はい、以上です。これで私のお話を終わります。

2. 「猛禽類の自然状態での安定的な存続に向けて」

釧路自然環境事務所野生生物課 塩野啓一

続いて猛禽類の自然状態での安定的な存続に向けてというタイトルで、釧路自然環境事務所野生生物課の塩野啓一さんにお願いしたいと思います。

ご紹介ありがとうございます。私は環境省の釧路自然環境事務所というところで働いている塩野といいます。自然状態での安定的な存続に向けてという長いタイトルですけれども、猛禽類保護増殖事業について簡単に紹介をしたいと思います。先程の中川さんの熱くて私も非常に興味深く聞かせてもらったんですけども、40年という長い期間で、一斉に調査を本当にたくさん的人が協力をして、長年積み重ねられた皆の協力があって進んでいる調査なんだなという風に私も感じた次第です。突然なんですけれど、これクイズ作って来たので、これだと思ったら手を上げてほしいなと思います。日本の絶滅危惧種、これはそのままだと絶滅をしてしまうかもしれない生き物。日本の生き物ですけれども、これは今何種類くらいあると思いますか。三択で。370くらいかな。3,700くらい、或いは37,000くらい。じゃ、1番の370種類くらいだと思う人、手を挙げてください。あっ、そんなにいませんか？ 皆知ってる人？ はい、ありがとうございます。2番の3,700種類ぐらいだと思う人。沢山ですね。皆知っていますね。3番の37,000種類くらいだと思う人。ありがとうございます。手を挙げてくれる人、ありがとうございます。正解は、3番3,700種類で多くの方が正解していました。ありがとうございます。絶滅危惧種については、いろんな生き物が登録されている、動物も食物も色々いるんですけども、北海道だとキタサンショウウオとかイトウとか皆さんご存知かと思います。猛禽類についても登録されておりまして、先程中川さんのお話にもあったようにオジロワシとか、オオワシなんか上にあるシマフクロウというのも登録をされているわけです。今、海の生き物、海洋生物を含めると第四次（レッドリスト）ということで3,772種類が今登録をされているという状況です。今絶滅してしまうという風に言ったんですけど、そもそも絶滅すると何が良くないと思いますか？ 地球の歴史は長いのでそもそもその中に当然絶滅をしてしまった生き物もいるし、新しく出来た種類もいるはずですよね。近年は人の生活、皆さんどんどん便利な生活になってると思うんですけども、その一方で絶滅をしてしまう生き物が人の生活の影響でどんどん増えているという風に言われています。そういう絶滅する生き物がどんどん増えていくと、どうなるのかということです。生物多様性というキーワード出したいと思うんですけども、今地球上に3千万種類もの凄いたくさんの生き物がいると言われているんですけども、そのたくさんの種類の生き物全てが複雑に係り合って存在していることを「生物多様性」と今日覚えていってもらいたいなと思います。いろんな環境があると思います。森だと川だと。今ここで釧路湿原ありますけど、湿原

だとか。いろんな生態系があって、それぞれその中にはいろんな生き物がいて、今日沢山の人が来てくれていますけれども、その1つの種の中にはそれぞれの1人1人個性が今日来ててる皆さんも1人1人個性があると思いますけれども、人も含めていろんな他の生き物が支えられながら生活をしているわけで、今日のテーマになってる猛禽類、オオワシとかですね。オオワシも当然他の生き物に支えられながら生きています。先程お話あった通りお魚も食べますし、鹿の肉も食べますしということですよね。これだけ他の生き物が支えられながら生きているので、絶滅のスピードがどんどん早くなってしまって、支えてくれる生き物の種類というのも少なくなっていくということなんですね。人の生活影響で減ってしまうものを、いかに減らしていくかであったり、特に大切な種類という物については守っていきましょうという話になっていくわけです。そこで最初に話した保護増殖事業計画という所に繋げて行きたいんですけども、先程も話した特に大切な種類というのは、種の保存法という所で国内希少野生動植物種という風に言っています。そういう種類については保護増殖業計画という計画を立てて、守っていきましょうという風について、その計画の中には目標ですか、取り組む内容というのを書いている訳です。このスライドの下の方に書いたのはその目標ですけれども、生息状況などを把握して、生息および繁殖を圧迫する要因。それを軽減を行うことによって、その種が自然の状態で安定的に巣を作り生きていけるようにする事というのを目標にしているわけです。北海道道東における猛禽類の保護増殖事業どんな物があるのか、先程のオジロワシ・オオワシもありますし、シマフクロウの計画があります。環境省では、希少な野生生物の保護増殖事業等を総合的に進めるための施設として、釧路湿原野生生物保護センターという施設を整備しています。はい、これシマフクロウの写真出しましたけど、今日皆さん来て頂く前に「推しの猛禽類決めましたか?」みたいな話があって、かぶってくれている人もいますけれども、シマフクロウもつけてくれている人もいるかと思います。このシマフクロウは、全長70cmくらい、翼を広げると1m80cmくらいということで、日本最大のフクロウと言われていて、水辺の周辺の森に住んで大きな木の樹洞、穴に巣を作って主に魚を食べているそんな鳥と言われています。数が減ってしまった要因としては、森を畠に変えていったときに生息地が少なくなっていましたとか、後は餌として魚を食べるんですけど、その川の工事とか水質が汚染されていくことによって魚が少なくなっていくことを、以前は言われていて、最近だとシマフクロウが住んでる所に人が入っていってストレスを与えてしまったりとか、交通事故に関連する事故、というのも要因として挙げられるようになってきてるわけですよね。そんなシマフクロウの保護増殖の取り組みとしては色々あって本当にいろんな方の取り組みに支えられているわけなんですねけれども、増やす取り組みとしては、人工の巣箱を設置して住める場所を確保してあげたり、広げるというところでは、生息環境整備と書いてありますけれども、魚が川を登れるように魚道という魚の道を作り、餌が獲れる場所を広げてあげたりとか、減らせないというところでは事故の防止対策とか、傷ついたシマフクロウを治療して野生復帰を目指すとか、生息域外保全というのは動物園等でシマフクロウを増やす取り組み等をされているかと思いますが、本当にいろんな取り組み、今日のイベントも普及啓発の一環になるのかなと思うんですけど、いろんな取り組みがされているころですよね。シマフクロウ

については、北海道とても生息適地、各地にあるんですけど特に道東ですね。知床とか釧路の周辺とか、とてもシマフクロウにとって大切な場所というのがたくさんあるのかなと思います。保護増殖事業の目標としてはそういういた大切な場所でシマフクロウ、つがいを増やしていったりとか、住んでいるその生息場所を少しずつ広げていきましょうという事を目標に皆で取り組んでいるという事になっています。オジロワシとオオワシについて、特徴を言っていた先程詳しいお話があったので私からは省略しようかなと思いますけれども、今日結構（オジロワシオオワシが）推しの方がたくさんいるので、格好いい鳥なのかなと思っていたりするんですけど、取り組みの方針としてはですね、減らさないという所が大切になってくるのかなと思います。

少しずつ先程増えてきてくれているという話もあった中で、今度はじゃあ減らさずに増えていくくれたらいいのかなという風に思います。事故を防止する対策ですとか、傷ついた鳥を治療してあげて野生復帰を目指すんですとか。ただ知ってもらうというところでは、まさに先程40年間の調査などありましたけれども、生息する状況を調べたり、こういった普及啓発のイベントを開いたりというところだと思います。これはオジロワシ、オオワシにとっても、シマフクロウだけではなくという事ですけれども、毎年そのワシはその冬に北海道に渡りに来ますので、それだけ北海道というのは生息場所として重要な場所というところをお伝えできればいいかなと思います。最後に、釧路湿原野生生物保護センターというのも簡単に触れて終わりたいと思います。こちら希少な野生生物の治療だとリハビリテーションできる、そして野生復帰を目指す取り組みなどを行なっているところで、環境省で整備をしているところですけれども、スライドにあるような展示施設としてグラデーションウォールとかいろいろ保全の取り組みについて紹介したりしますので、この近く車で20~30分の所ですので、もし興味のある方に対しては是非足を運んでいただけたら嬉しいかなと思います。同時に傷ついた猛禽、オオワシ等もこちらに運ばれてくるらしいです。簡単ですが、紹介としてお話をさせていただきました。以上どうもありがとうございました。

先程お話をあった釧路湿原野生生物保護センターご存知だったよって方いました？結構いらっしゃいますね。じゃ、行ったことあるよという方。こんなにいらっしゃいました。今日は結構猛禽類に興味が深い方がいらっしゃるのかなと思ってとてもありがとうございます。

3. 「野生の猛禽類を守る」

猛禽類医学研究所 渡辺有希子

「野生猛禽類を守る」というタイトルで、猛禽類医学研究所の渡辺有希子さんお願ひいたしす。ご紹介頂きありがとうございます。猛禽類医学研究所というところで獣医をしています、渡辺といいます。よろしくお願ひします。猛禽類医学研究所という会社名で、実際にはな、塩野さんからご紹介ありました釧路湿原野生生物保護センターというところで運び込まれてくるオオワシ、オジロワシ、シマフクロウなど希少猛禽類が来たものを治療して野生に返すということをやっております。本日後ろに控えております代表の斎藤慶輔も来ておりまして、斎藤と私と他獣医師2名もありますので、研究員等含めて9人でやっています。今日はですね「野生猛禽類を守る」という所のお題いただいたんですが、ゲームをしようと思って作ってきたんですが、せっかくですので今日は打ち合わせではお子さん向けのイベントということで打ち合わせたんですけど、今日は大きなお子さんもいっぱいいらっしゃってありがとうございます。最初ねお子さん手伝ってもらってもいい?カード引いてもらって、その後、食べるものを引いてもらってという所で、何が起きるかというのを追っていきたいと思っています。まずちょっと引いてもらって何を引いたかというと?「オジロワシ」。オジロワシを引いてくれました。オジロワシのこのカードは、なんか使ってもらったらしおりにも使ってください。じゃ、もう1枚。食べるものを引いてもらいます。これじゃないの。これじゃないです。ちっちゃいの。オジロワシは何を食べるでしょうか。カモ。カモ引いてくれました。カモを食べます。いろんな水鳥。上手にハンティングして食べます。その下にですね泣いてるマーク出てきちゃったんですけれども、何が起きたのか?今ですね鳥インフルエンザがとても流行っておりましてオジロワシも、インフルエンザに感染した水鳥を食べると感染してしまうんです。人と同じく、脳炎、脳症状を起こしてフラフラになって運び込まれてくることがあります。死んでしまうものもあれば、発見が早ければ治療をして、薬を飲んでもらって野生に帰るということもこれまでやってきました。ただその数はわずかで、できるだけ早く発見して治療に繋げるのが大事だなと思っています。はい、ありがとうございます。ご飯食べて行かないと生きていけないんですけども、生きていく中でいろんな事が起きます。猛禽類も生きていくのは大変です。ありがとね。こちらもお子さんがいるので誰か引いてくれる人います?恥ずかしいよね。こういうの恥ずかしいよね。誰か引いてくれる?ありがとう。じゃお手伝いしてもらいます。お。何引いた?オオワシ。オオワシ引いてくれました。じゃオオワシのご飯選んでもらいます。ハンティングで何を捕りますか?お魚。お魚ゲットでした。はい、オオワシはですね、お魚メインで大好きです。よく食べています。先程の中川先生のお話でもありましたが、ほっちゃれ含めて、遡上魚よく利用しています。しかし、その後ですね、何が起きたのか、泣き顔になってしまったんですが、海岸で餌を探して高い所にとまっていたら、そこが木ではなくて電柱だったんですね。電柱、漏電部分があって、残念ながら感電事故に遭ってしまいました。

感電事故もですね猛禽類だから大型なので、翼を広げて止まろうとした時、もしくは飛び立とうとした時に危険な場所と触れてしまって、感電事故発生しています。電力会社とともに危ない場所に止まらせないといった努力なんかも一緒に取り組んだりしていますが、なかなか全部をなくすことは難しくって、最近はですね、新しく電線作ります、電柱作りますという所は、最初から危なくないような形にしてもらったりもしています。誰かもうちょっと引いて、引けますよって人います?引いてくれる?じゃ 2 人いるから 2 枚じゃ引いてもらおうかな。まず、何引いてくれましたか。オオワシ。オジロワシ。ありがとう。オジロワシ引いてくれたの。ちょっと待っててね。どっちにする? オジロワシ。はい、ありがとうございます。じゃ先にちょっとオジロワシのご飯引いてもらおうかな。はい、オジロワシのご飯。これじゃないです。オジロワシと鹿を発見しました。鹿食べます。鹿はですね、襲って食べるというよりかは、小鹿だったら襲って食べることもたまにあるようなんですけれども、割と死んでしまったものを探して食べています。もういいよ。オジロワシ、1 枚引いてもらってもいいですか? オジロワシももう 1 度魚が出ました。ありがとうございます。では魚と鹿ですね。オジロワシお魚も大好きです。海で一生懸命探しに行きます。海鳥、ウロウロ探している時に風車があって風車のブレードとぶつかってしました。ほとんどがですね亡くなってしまうことが多いですね。翼がちぎれてしまったり体が切れてしまうことで、なくなるオジロワシというのが最近数を増やしています。いやごめんね。魚ね、探して食べてただけだったんだけどね。そして鹿ですね。鹿。鹿もですね、最初にどうやら列車に引かれていたみたいで。列車に引かれた鹿を一生懸命食べてる時に次の列車が来て、自分も引かれてしまいました。1 回に 1kg 近くのお肉をガツガツ食べるんですよ。次に餌あたるのがね見つけられるのがいつかわからないので、食べれる時に食べとく。体重が 4kg から 6kg ぐらいのワシが 1kg ぐらいの肉食べるって凄い量なんですね。皆さんの体重聞かないですよ。聞かないんですけど、10%のお肉一生懸命食べたと思って、その後もう動けないような状態で逃げる事ができずに引かれてしまうという事が多くあるようです。大体 10 分ぐらい経っている感じですかね?あと 1 回ぐらい引いても大丈夫? じゃあ小さなお子様だけじゃなく大きなお子様も引きたいという人います? あつ、大きなお子様だ。じゃ、最後になりますが、いいやつ引いてほしいですね。今のところねオオワシとオジロワシ引いて頂いてるので、それ以外の猛禽類引いて頂くと。いいです。それでいいです。シマフクロウです。ありがとうございます。シマフクロウ引いていただきました。シマフクロウのご飯はシマフクロウは、先程のおはなしの中でもお魚やネズミなどを食べるというお話がありまして、カエルを食べててくれました。ありがとうございます。カエルを食べて雪解けとともにたくさん目覚めて出てくるカエル。雛のためにいっぱい取って運んでご飯としてあげてくれたりしています。道路に出てきたカエルを狙っていたみたいで、自分も車とぶつかってしまいました。カエルはですね、結構雨の日とか道路にピコピコ出てくるの皆さん運転してありません? カエルはカエルで水辺から水辺移動したいので、濡れてるような時は結構出ますね。シマフクロウもそれを分かってるんです。雨の日はシマフクロウもしかしたら地面にいるかもという思いで運転していただけだと、このストップ・ロードキルという T シャツ今日は私も着てきたんですが、シマフクロウの主原因としては 1 番多いのが交通事故なので、是非安全運転に協力

いただけますと嬉しいです。シマフクロウは夜なので、車のライトが目に入ると、もともと夜行性でわずかな光でご飯を見つけられるような素晴らしい目を持っているのに、車のライトでも眩しくって動けない。硬直状態で正面衝突でぶつかってんだなっていうのがね、解剖して分かたりするんですけれども。なので、とにかく安全運転をお願いできれば嬉しいです。この子はですね、幸いにして生きていました。生きていたんですが翼が折れていて、ちょっとね飛ぶことができないんですよ。今これどこにいると思います？菊池さん今どこにいますか？札幌市の円山動物園にいます。はい、しかも今お母さんですもんね？はい、立派なお母さんで4羽も子育て頑張つて育ててます。ありがとうございます。野生に返す事は今はできないんですけども、飛ぶ事ができないので帰れないんですが、今円山動物園でお母さんとなって雛を育ててくれています。いつかその雛が野生に帰るような形にできたらいいなと思っていて、野生生物保護センターでは救護・治療というのをやっていますが、残念ながら亡くなってしまうものもたくさんいますし、野生に帰ることができない個体もいます。でもそれを動物園と協力して、次の命、次の世代に繋げていくという活動も行っています。はい、以上今日、簡単になりましたが、こういったことをやっているという紹介でした。今日ご協力いただいた方、ありがとうございました。

渡辺さん、ありがとうございました。ちょっとゲームが入ってお子様達も楽しめたんじゃないかなと思います。ここまでですね、野生の猛禽類達の生息の状況とか、後、何が起こっているか問題というのを皆さんに知っていただけたと思います。

ここからはですね、動物園からの発表となります。続いては、釧路市動物園の藤本智さん、「動物園とシマフクロウ」というタイトルで発表をしていただきたいと思います。動物園での取り組みどのような事をしているかというお話を来ていただきたいと思います。では、藤本さん、よろしくお願ひいたします。

4. 「動物園とシマフクロウ（釧路市動物園を中心に）」

釧路市動物園 藤本智

皆さんこんにちは。釧路市動物園の藤本といいます。今日はよろしくお願いします。釧路市動物園、皆さまのおかげを持ちまして来年50周年を迎えることができます。なので、来年はいろいろやりたいと思っておりますので、またよろしくお願ひいたします。動物園はね、楽しい所をお伝えしたいんですけども、今月は旭山動物園の方からライオンとシロテテナガザルが来てますのでね、新しいメンバーが仲間入りしております。だけど、ちょっと残念なことにね、ホッキョクグマキロル今月ちょっと悲しいお知らせを皆様に届けてしまいまして申し訳ありませんでした。そんな中で、旭山からはねシマフクロウも来てるんですけど、シマフクロウ、皆さんご存知かもしれませんか、なかなかねブレイクできない状況になっております。道東地域というとね、シマフクロウとあとはタンチョウですねツートップかなと思うんですけど、後は今まで出てきたみたいにね、オオワシは凄い人気ですね。世界一美しいワシって言うんですかね。欧米のバーダーさんの憧れの鳥ですし、タンチョウは中華圏の人たちの憧れの鳥なので、インバウンドでたくさんの方が来てくれますが、シマフクロウは残念ながらなかなかメジャーになりきれないで、ちょっとひっそりとしております。そんなシマフクロウのお話をさせてもらいます。

(動画を見て) シマフクロウです。今鳴きましたけども、シマフクロウの声です。(ここまで) 皆さん聞いたことがあるかもしれませんか、動物園では日中は鳴かないです。ほとんど飛ばない、鳴かない、踊らないということで、ぬいぐるみがいてもわからないんじゃないかという鳥ですが、閉園までいてもらいますと、この時期は日も陰っておりませんので、そこかしこから鳴き声が聞こえますので、見に来てもらえばと思います。シマフクロウをしゃべりだすと長いので、先程の環境省の人の話にもありましたけども、シマフクロウはこんな鳥です。シマフクロウは大陸にもいるんですけど、大陸のは違って北海道と島の部分、北方領土ですけれども、そういう所に住んでるシマフクロウは、ごく僅かとなっております。そんなシマフクロウんですけど、実は動物園と昔から古い付き合いがあるんです。ここは釧路じゃないですけど日本に動物園が1番最初に出来たところは、東京の上野動物園なのですが、上野動物園ができた時から実はシマフクロウって飼育されてたんです。えっと思うかもしれませんか、上野動物園ってなんでも飼育してるんです。ほとんどの方が知らないかもしれませんか、二ホンオオカミも上野動物園で飼育してました。なので、上野動物園はさすが日本一です。なんでも飼育しています。そのシマフクロウがどこから来たかというと動物園ができる前ですけど、明治の8年に小田健治さんだと思うんですけども、読み方は難しいですから、なんて読むのかというのはよく分からないんですけど、この方が上野動物園の前身の所に寄付してます。小田健治さんって一体何者なのかというのを調べてみたら、明治政府の物産局に勤めて、その当時、ヨーロッパの方でウィーン万国博覧会が開催されるということで、日本からも何か出展しようということで、いろんなものを集めている時に小田健治さん

が活躍してて集めてたという記録が残ってるので、名前が一緒なのでおそらく同一人物なんじゃないかなということになっております。その鳥が上野に行って引き継がれて、今に至ると言ってもこのシマフクロウの血筋は途絶えているので、動物園とシマフクロウは昔から古い付き合いがあったんだなって思っていただければいいかなと思います。上野で合計9羽飼育します。同時に4羽飼育してたかなと思います。それが昭和初期まで。その後、戦後ですが昭和20年以降になると、上野で3羽、天王寺・大阪で1羽、平川・鹿児島の動物公園、帯広、円山、旭山でも飼育記録は残ってるんですけども、残念ながらほとんどが性別不明。死んで解剖して初めて性別が分かるというところです。もしくは1羽しか飼育してなかったので当然繁殖まではできませんでしたということになります。そんな中で釧路市動物園、昭和50年、1975年に開園します。当初のコンセプトは北方動物園と地元産にこだわるということで、やっております。なので最初からシマフクロウとタンチョウ鶴にはかなりの思い入れを込めて対応しております。この施設、動物園行ったことある方はわかると思うんですが、ハクトウワシの隣の所に、シマフクロウの顔出し看板が入っている、今は使われない動物舎があるんですけど、開園当初ここでシマフクロウを飼育展示してたという風に聞いております。残念ながら、写真とかの記録が残っていないので、本当かどうか、写真でお見せすることができないのですが、今のシマフクロウに顔出しの看板があるところです。シマフクロウなんですけど、どこから手に入れたかというと、古い人はひょっとしたら覚えてるかもしれません、もともと鶴ヶ岳公園の一角で、郷土博物館、釧路市博物館の前身です。郷土博物館の付属施設の、保護施設でヒグマとかワシとかシマフクロウとか飼っていた施設があるらしいんです。子熊を入れたヒグマを動物園に連れてくるのに、子熊だから小さな入口で入れていたけど、大人になったら取り出せないからぶつ壊して持ってきたという話を聞いてますけど、そんな施設からシマフクロウを引き継いで5羽飼育始めます。ただ、シマフクロウオスメスも分からない。どうやって飼ったらいいのか分からない。繁殖もどうやつたらいいか分からないという手探り状態でのスタートになって、これは、IUCN世界自然保護連合の日本支部から助成いただいて、いろんなことを調べておりました。この年表が細かすぎて読めないかもとは思うんですけど、開園してシマフクロウ5羽飼い始めました。すぐに1羽亡くなってしまって、4羽になったんですけども、74年にやり始めて、なんとか繁殖させようと思って頑張ったんだけど、なかなか繁殖しない。仕掛け、いろんな事がありました。詳しいことは、すいません、割愛します。

ようやくです、90年代になって、私よりも上の諸先輩方なのですが、これはまずいということで、シマフクロウを何とか繁殖させようということでシマフクロウってさっきも言いましたけど、日中は飛ばない、鳴かない、動かない、踊らない鳥、いわゆる夜行性ですよ。メインは夜なんです。繁殖シーズンは、真冬なんです。1月2月、シマフクロウの相性を見るのに、集めて、夜通しテントの中からずっと観察する。誰と誰が仲いいのか観察する。ということをやって、こいつとこいつなら何とかなるんじゃないかというので、94年に初めてそのペアから産卵して孵化までいったんですけど、残念ながら亡くなってしまったんですけども、翌年95年に世界で初めて飼育下で繁殖が成功しました。もう開園してから20年です。20年の集大成、諸先輩方が凄い

頑張りで何とかバトンを受けて今こうやって何とかやっております。増えていって、今までなんとこれまでに累計 6 つがいが繁殖に成功しております。回数でいくと 31 回で、42 個の卵が孵化しております。ただ、半年以上生存したのは 31 羽。全部で 31 羽かえってます。今では道内の 3 園、釧路市動物園、札幌の円山動物園、旭川の旭山動物園、道外であれば秋田の大森山動物園、長野の茶臼山動物園、栃木の那須どうぶつ王国というところでも飼育をしていただいて合計 6 園でオスが 11、メスが 16、不明が 5。性別不明は、雛ですけども合計 32 羽を飼育するに至っております。5 羽からスタートしたものがようやくここまでなったかなというところです。野生の数は先程環境省のお話もありましたけど、発表では 100 つがいぐらい。ペアでいいますと、200 羽と、つがいになってないものも入れると、200 数羽いるのかなというところまで回復してきてるというところです。飼育下の生態ですが、今が 11 月ですので、ようやく子育てが一段落して、次の繁殖に向けてオスとメスが絆を深めてるところになります。オスからメスに対して求愛給餌ですか、プレゼントをあげたりして、3 月に産卵して、4 月に大体 35 日温めるんですけども、孵化していくということになります。そして 1 年が次々とまた回っていってくれるといいなあと思ってます。動物園ではなんで繁殖させるのかというと、当然動物園の飼育個体ですので展示しなきゃいけないというのもありますけど、先程まで野生の状況の話が出てたと思うんですけども、そのなかで生息域外保全、生息地じゃなくて生息地以外で保全する取り組みということで動物園はやっています。いわゆる保険です。野生で何かあった時にすぐにバックアップが取れるようにということで、動物園はその保険として個体の維持管理を行なっております。残念ながら、先程の話にもありました、放鳥までは至ってないんですけども、過去 1 羽だけ放鳥したことがありますけどもね。20 年なかなか繁殖できないってことでお話ししたと思うんですけど、そもそもオスとメスが分らないというところがあったのと、あとペアリングですね。相性がわからないというところがあって、動物園ではどうしても相性というのを考えるんですね。そのペアリングの条件としては並んでとまる。なんかね、えっ、えっ?と思うかもしれません、並んで止まるのも重要なんですよ。仲良くなかったら、あっちゃとこっちゃにしか止まらないとかね、下手すると喧嘩が始まるとかがありますので、仲良く並んでとまるというのは重要ですね。あと求愛給餌、オスがメスに甲斐甲斐しくボクのプレゼントを貰ってよということで渡す。あとは 1 番もっと大事なのは鳴き交わしですね。シマフクロウにとって鳴けない、歌えないオスは役立たずになりますので、綺麗な良い声で、ボボーと鳴いて、メスがウーって答えるんですけども、これがとても大事です。オスとメスぱっとみ、分かんないですよね。僕もよく分からなくなります。なので、僕のワンポイントガイドをやっても五分五分の確率なんですけどという話をするんですけど、ぱっと見たらよく分かりません。え~と思うかもしれませんが皆さんもお家の近所にいるハトとかカラスとかスズメとか、オスメスが良く分らない事があろうかと思うの一緒ですね。ペアリングですね、これが昔、同居させたときに一晩中、一晩だけじゃなくて何日もかけて相性をみるんですね。オスのアカンとラクヨウを入れて、メスのピーコとの相性を見るということをやってます。求愛給餌が見られるか、鳴き交わしがあるか、マウント行動があるか、排他的行動があるかという事でやるんですけど、オスからメスは分かるんですけど、オスからオ

スに求愛給餌やったりとかというのもかなり目撃されてるので、これどう理解するのか分からぬんですけど、シマフクロウ同士もオススメ分かってないのかという話もあるんですけど、人間が見ててもよく分からないですよね。この中で、アカンとピーコがよかろうということで、ようやく繁殖に至りました。昔は、ケージの数も少なかったので、隣同士のゲージに入れて一緒にすると喧嘩するかもしれないという危険があるんですよ。なので、隣同士で並べておくのが1番安全なんんですけど、そんなことも言ってられないということでドッと突っ込んで、いわゆる合コンをさせてやるということで。夜通し観察するというね、気合いと根性のいる事をやってました。今は、横並びの動物舎がありますので、それをを利用して誰と誰が仲いいのかなというのを見ます。夜通し真冬の寒いところで私もなかなかそこまでの気合いと根性も足りないのかもしれませんですが、今は文明の力があります。ビデオとかICレコーダーとか使ってそれの判定をしてあります。並んで止まる、同居させた時、それから数ヶ月経った時、これが繁殖直前ですね。撮り方だろうと思うかもしれませんが、毎日見てるところ思います。こいつとこいつはいけるなとか思つたりするんですけど、あとは求愛給餌ですね、飛んできたのがオ一飛んできたといってカメラバタバタしますけどもね。オスのR黄がヒヨコを持ってきて、アオイちゃんにプレゼントをしようとしてるんですけど、ピーピーと甘えた声でどうですか?どうですか?ってやってるんですけど、ヒヨコはあんまり好きじゃないので結局受け取ってくれてません。そのうち飛んでいっちゃうんですけど、どうしようと思ってね。お前が見てるからだろと思ってね、ちょっと睨まれてるんですけど。「ごめんなさい。こっちも記録なんで。」とか思いながらね。黄色い足環が見えると思うんですけど、R黄というので、飼育員は足環が付いてる、付いてない、何色付いてるかということで個体識別をします。全然受け取ってくれないでしょ。そのうち、嫌気がさしてアオイちゃん飛んでっちゃうんですけども。追いかけてまたR黄が飛んでいくんですけども。こんな。嫌、嫌っていやしつこいねあんた。魚だったら一発で受け取ってくれると思うんですけど、飛んでっちゃいましたね。でも、頑張れ、頑張れ、R機黄頑張れって、追いかけて行きます。ということで頑張ってくれていまう。鳴き交わしですね。手前からR黄で奥がアオイちゃんです。頑張ってということで、なんかアオイちゃんがR黄にちゃんと鳴けって睨んでいるような気がするんですけども、もうこうやって鳴き交わしをすると、よし、もうこれで大丈夫って思うんですけど。こちらは、その先になります。交尾になりますね。シマフクロウの場合なかなか見ることはできないんですけど、これは、トカチとムムいう個体なんですけど、この子達は結構日中やってくれるんで、良く撮影することができます。朝のすがすがしいズメがチュンチュン鳴いてる中で、撮影したやつで、今動いてるのがメスのムムですね。ちょっと長いので飛ばします。交尾の方も乗っかって、めっちゃ重そうですね。ただ、鳥の交尾は一瞬です。はい、おしまいということで。オスはさよなら~とすぐになくなっちゃう。自然産卵がいいんですけども、親が行うのとあとは人工をやるには、人の手でやると、里親への託卵ということもやって、何とかかんとか系統を繋いで命を繋いで、何とか3世代目まで、今いってるという状況になります。ただ、解決すべき問題としてはまだまだ数が少ないので個体を増やすと同時に新しい系統も作って行って、いろんなところで動物園で飼育してもらっていくというところが、解決すべき問題かな

と考えております。ということで、ご清聴どうもありがとうございました

貴重な映像をたくさん見させていただきました。求愛給餌の行動は、とても人からするとおかしそうで、でも素晴らしい行動だなあと思います。じゃ、次は円山動物園からシマフクロウ、オオワシなど猛禽類を担当しております菊池さんの発表で、「鷹匠の技術を使った猛禽類の保全」ということで発表お願ひいたします。

5. 「鷹匠の技術を使って猛禽類を守る」

円山動物園 菊池晏那

こんにちは。札幌市にある円山動物園という所から来ました、猛禽類の飼育員をしてます菊池と申します。皆さん札幌市の円山動物園来たことあるよという方いらっしゃいますか？結構多い。嬉しいです。遠いのにありがとうございます。最近は新しい施設のオランウータンとボルネオの森という屋内施設が森のようにできる施設だったりとか、去年生まれた子象のタオも元気に過ごしてますので、また札幌にいらした際は円山動物園来ていただけると嬉しいです。

今日は、猛禽類の話、鷹匠って皆さん聞いたことがありますか？鷹を使って狩をする人たちなのですが、そういう技術を円山動物園の飼育とか繁殖、あと保護された動物のリハビリなんかに使って、より動物に合わせたものをできるようにということでやってますので、そちらの紹介をしたいと思います。実はこの辺は、環境省の方も喋っていますけども、IUCN のレッドリストというところでオオワシ、シマフクロウ、オジロワシなんか絶滅危惧種という括りでされております。固い話はスッと飛ばしますけれども、札幌市で動物園条例というのができまして、動物園で何をするべきかということがしっかり書かれています。長いので割愛すると動物園はちゃんと動物をいい状態で飼うこと。それで野生動物をちゃんと守る活動をする。そして生物多様性の保全に役立てる事をします、という風に書いてありますので、これから動物園はただ飼うだけじゃなくて、ちゃんと野生生物の保全に役立てる事をしなければいけないということで、円山動物園もそのようにしています。飼育員の立場から猛禽類を守る、今日いろいろな立場の方から猛禽類守る活動を発表してもらいましたけど、動物園は動物園の立場でどんな風に、守る活動してるかということで、まず猛禽類、いろいろいますけど、このチゴハヤブサという鳥ですけども、これ雛ですね。雛のうちからしっかり猛禽類の顔をします。格好いい顔しますけれども、実は猛禽類って生まれた時から猛禽類じゃないんですね。最初はまだ何もわからない。何もインストールされてないパソコンと同じ。見た目は猛禽類なんんですけど、まだ何もできない状態。そこから餌は何だとか、自分の種類は何だとか、誰が繁殖相手でとか、どういう風に飛んで狩をするというのは1つ1つ刷り込みったり学習ったり、勉強をして猛禽類にだんだんとなっていきます。で、ムキムキの狩りができるアスリートの状態になっていくということなんです。保護された猛禽類がたくさんやってくるんですが、昔は保護されて、怪我を治療してそのまま放してたんですけども、皆さんも、そうだと思うんですけど、長く入院した後フルマラソンを走れと言われても無理なように、猛禽類の怪我は治ってるけど結局狩りができなくてまた弱ってしまうという事があったんです。なので、しっかり狩りができるトレーニングをしてから野生に返すということを始めました。その技術が、鷹匠という伝統の鷹狩の技術というのを参考にしています。鳥を調教して筋トレさせる技術を持ってますけども直接触ったり、鳥のトレーニングをする。こうして触る

ことで猛禽類の精神状態、体の状態ということを、見極めることができる。なかなか外から見た状態で、これが太っているのか痩せているのか、ふよふよの脂肪がいっぱいなのか、ムキムキの筋肉なのかというのがよくわからないんです。こうやってちゃんと手に据えて、飼育して近くで見る事でそういう状態がよく分かる。その状態よく見て、保護された猛禽類に狩りの方法を教えて安全に野生に返すという事をしています。ただ、猛禽類医学研究所の渡辺さんも紹介していましたけども、たくさんの猛禽類が事故にあっていて、野生に返せるやつはそれでいいんですけども、翼が折れてしまったりしてどうしてもやっぱり野生に帰れない動物たちもたくさんいるんですね。そういう動物たちも動物園ではたくさん飼っています。渡辺さんのスライドでも出てきましたけど、これはシマフクロウ事故にあって今円山動物園にいますけれども。交通事故以外にも列車事故、感電事故、いろんな原因で収容される猛禽類がたくさんいます。さっきここに落ちてたシマフクロウのその後の写真があるので紹介します。これが羽根が折れたシマフクロウですけども、しばらく釧路市動物園で飼われてたんですね。まずは収容されて野生に帰れないで釧路市動物園でずっと飼われてた。やっぱりケガをしている個体、さっき鳴けない個体は繁殖に使えないと言っていましたけど、繁殖に使えないということで怪我した動物はずっと1羽で飼われていたり、繁殖に参加していなかったんですけども、こういう動物がたくさん増えてきて、動物の生きがいは何かというと、やっぱり繁殖することというのはすごく生きがいになるので、何とかケガしてしまった個体でも繁殖に参加できないかということで白羽の矢が立ったのが、このレインというメスの個体です。怪我をした動物の中でも一番やる気に満ち溢れた顔をしていたから連れてきたうちの園長が言っていました。で、円山動物園にやってきて、これヒナですね。しっかり繁殖成功しまして、こっちは双子のヒナですけども。毎年今のところ繁殖に成功しています。で、これ事故現場ではないんですけど、橋の上で事故にあう個体が多いみたいなので、レインという個体が事故にあってしまった現場もその後は橋の上にポールなり旗なりが立って事故が起きないように対策がされているということですね。でこんな感じで繁殖とかリハビリとか円山動物園はやってきたんですけど、さらにもっとちゃんと取り組もうということで猛禽類の野生復帰施設といおうバックヤードが建っています。非公開施設。円山動物園に来てくれた方も見に行く機会が無いかもしれない。ここ入ったことあるよという方いますか?いらっしゃいますね。やっぱり来たことある人の中でも少ないですよね。夏場はバックヤードツアーをしているのでぜひ見に来てください。ここ何をしているかというと、展示は展示でオオワシなりシマフクロウなりを展示しているんですけども、展示は展示、猛禽類はリハビリはリハビリ、繁殖は繁殖と専門施設をそれぞれ建てています。ここはオオワシの繁殖専用の施設。こっちはリハビリ中のオジロワシですね、ここリハビリの広いケージが建っていますけども、それ専門に行えるような施設を作っちゃんと集中できるようにしています。なんでこんなに繁殖とかリハビリとか研究とかいろいろ動物園が頑張っているかというと、さっきもシマフクロウが繁殖するまで20年かかったって言いましたけど、猛禽はまだまだ分からなことがたくさんある。最初の中川さんの発表でも40年もずっと研究して何とか今のオジロワシとかオオワシの状況をわかろうという研究をたくさんされていますけど、やっぱりまだまだ分からなことがたくさんある。ってことで、

わかるようになるまで今日は、猛禽類の話、鷹匠って皆さん聞いたことありますか？鷹を使って狩をする人たちなのですが、そういう技術を円山動物園の飼育とか繁殖、あと保護された動物のリハビリなんかに使って、より動物に合わせたものをできるようにということでやってますので、そちらの紹介をしたいと思います。実はこの辺は、環境省の方も喋っていますけども、IUCN のレッドリストというところでオオワシ、シマフクロウ、オジロワシなんか絶滅危惧種という括りでされております。固い話はスッと飛ばしますけれども、札幌市で動物園条例というのができまして、動物園で何をすべきかということがしっかり書かれています。長いので割愛すると動物園はちゃんと動物をいい状態で飼うこと。それで野生動物をちゃんと守る活動をする。そして生物多様性の保全に役立てることをします、という風に書いてありますので、これから動物園はただ飼うだけじゃなくて、ちゃんと野生生物の保全に役立てることをしなければいけないということで、円山動物園もそのようにしています。飼育員の立場から猛禽類を守る、今日いろいろな立場の方から猛禽類守る活動を発表してもらいましたけど、動物園は動物園の立場でどんな風に、守る活動してるかということで、まず猛禽類、いろいろいますけど、このチゴハヤブサという鳥ですけども、これ雛ですね。雛のうちからしっかり猛禽類の顔をします。格好いい顔しますけれども、実は猛禽類って生まれた時から猛禽類じゃないんですね。最初はまだ何もわからない。何もインストールされてないパソコンと同じ。見た目は猛禽類なんですけど、まだ何もできない状態。そこから餌は何だとか、自分の種類は何だとか、誰が繁殖相手でとか、どういう風に飛んで狩をするというのは 1 つ 1 つ刷り込みったり学習だったり、勉強をして猛禽類にだんだんなっていきます。で、ムキムキの狩りができるアスリートの状態になっていくということなんです。保護された猛禽類がたくさんやってくるんですが、昔は保護されて、怪我を治療してそのまま放してたんですけども、皆さんも、そうだと思うんですけど、長く入院した後フルマラソンを走れと言われても無理なように、猛禽類の怪我は治ってるけど結局狩りができなくてまた弱ってしまうという事があったんです。なので、しっかり狩りができるトレーニングをしてから野生に返すということを始めました。その技術が、鷹匠という伝統の鷹狩の技術というのを参考にしています。鳥を調教して筋トレさせる技術を持っていますけども直接触ったり、鳥のトレーニングをする。こうして触ることで猛禽類の精神状態、体の状態ということを、見極めることができる。なかなか外から見た状態で、これが太っているのか痩せているのか、ぷよぷよの脂肪がいっぱいなのか、ムキムキの筋肉なのかというのがよくわからないんです。こうやってちゃんと手に据えて、飼育して近くで見る事でそういう状態がよく分かる。その状態よく見て、保護された猛禽類に狩りの方法を教えさせて安全に野生に返すという事をしています。ただ、猛禽類医学研究所の渡辺さんも紹介していましたけども、たくさんの猛禽類が事故にあっていて、野生に返せるやつはそれでいいんですけども、翼が折れてしまったりしてどうしてもやっぱり野生に帰れない動物たちもたくさんいるんですね。そういう動物たちも動物園ではたくさん飼っています。渡辺さんのスライドでも出てきましたけど、これはシマフクロウ事故にあって今円山動物園にいますけれども。交通事故以外にも列車事故、感電事故、いろんな原因で収容される猛禽類がたくさんいます。さっきここに落ちてたシマフクロウのその後の写真があるので紹介します。これが羽根が折れた

シマフクロウですけども、しばらく釧路市動物園で飼われてたんですね。まずは収容されて野生に帰れないので釧路市動物園ですーっと飼われてた。やっぱりケガをしている個体、さっき鳴けない個体は繁殖に使えないと言っていましたけど、繁殖に使えないということで怪我した動物はずっと1羽で飼われていたり、繁殖に参加していなかったんですけども、こういう動物がたくさん増えてきて、動物の生きがいは何かというと、やっぱり繁殖することというのすごくて生きがいになるので、何とかケガしてしまった個体でも繁殖に参加できないかということで白羽の矢が立ったのが、このレインというメスの個体です。怪我をした動物の中でも一番やる気に満ち溢れた顔をしていたから連れてきたうちの園長が言っていました。で、円山動物園にやってきて、これヒナですね。しっかり繁殖成功しまして、こっちは双子のヒナですけども。毎年今のところ繁殖に成功しています。で、これ事故現場ではないんですけど、橋の上で事故にあう個体が多いみたいなので、レインという個体が事故にあってしまった現場もその後は橋の上にポールなり旗なりが立って事故が起きないように対策がされているということですね。でこんな感じで繁殖とかリハビリとか円山動物園はやってきたんですけど、さらにもっとちゃんと取り組もうということで猛禽類の野生復帰施設といおうバックヤードが建っています。非公開施設。円山動物園に来てくれた方も見に行く機会が無いかもしれない。ここ入ったことあるよという方いますか?いらっしゃいますね。やっぱり来たことある人の中でも少ないですね。夏場はバックヤードツアーをしているのでぜひ見に来てください。ここ何をしているかというと、展示は展示でオオワシなりシマフクロウなりを展示しているんですけども、展示は展示、猛禽類はリハビリはリハビリ、繁殖は繁殖と専門施設をそれぞれ建てています。ここはオオワシの繁殖専用の施設。こっちはリハビリ中のオジロワシですね、ここリハビリの広いケージが建っていますけども、それ専門に行えるような施設を作っちゃんと集中できるようにしています。なんでこんなに繁殖とかリハビリとか研究とかいろいろ動物園が頑張っているかというと、さっきもシマフクロウが繁殖するまで20年かかったって言いましたけど、猛禽はまだまだ分からなことがたくさんある。最初の中川さんの発表でも40年もずっと研究して何とか今のオジロワシとかオオワシの状況をわかるという研究をたくさんされていますけど、やっぱりまだまだ分からなことがたくさんある。ってことで、わかるようになるまで長い時間がかかるわけですね。さっき絶滅危惧種って言いましたけども、もっともっといつか鳥の数がすごく減ってしまって絶滅寸前になってから慌てて守らないってことで増やしたり、データを集めたりしても遅いんですね。なので、まだ数がいるうちからしっかり動物園のようなところで飼育したり繁殖できるような技術を持っておく。で、やっぱり野外で観察しているからこそわかるデータもありますけども飼育していないとわからないこともあります。なので、それぞれ作業分担というかんじで飼育しているからこそわかるデータをずっと集めて取っておくというのがすごく大事なんですね。いざという時には動物園で生まれた個体を野生に返せるように準備しておくというのがすごく大事なことです。最後なんですけど釧路市動物園とか円山動物園では、さっきワンポイントガイドをしてると藤本さんが言っていましたが、ガイドとかいろんな体験、実際に今日も羽根触ってみた方たくさんいると思うんですけど、実際さわって触ってみてみると、猛禽類って格好いいな、すごいなと実感するわ

けですね。なのでぜひ動物園、野生の猛禽類を見に行っていただいてもいいんですけども、猛禽類を好きになってもらって、今日はいろんな研究者の方、国、民間の方、動物園の方、いろんな立場の方が猛禽類を守るために頑張っています。その施設の人1人だけでは、なかなか守る事ができないので、みんな協力して守っていくというのをしていかないといけないです。今日来られられた皆さんもこのイベントがあるという情報をキャッチしていただいてここに来てくれるというのが本当にすごく嬉しいです。こんなに猛禽を気にして興味を持っていただけるかたがたくさんいるんだなと思いましたので、ぜひ今日の事をいろんなお友達にも話していただいたらとか、皆さんの活動を応援し続けていただけると本当に嬉しいなと思います。この後は質問コーナーがありますので、今日のお話し聞いて気になったこと何でも聞いていただければと思いますので、是非そちらも楽しんで行ってください。ということで、円山動物園のお話はこれにて終わります。ありがとうございました。

質問コーナー

家が海岸部にあるそうで、ワシが、海の波が岩に当たって、起きる上昇気流に乗ってるよう見える時があります。それが遊んでるの？何なのか分かりません。これはワシの生態に関する事なのでどなたにお答えしてもらえた？中川さん、いかがでしょう？海岸の特に崖になってる所とか、斜面、断崖になつたりするところの断崖のふちを、羽ばたかないで飛んでいくのはよく見る光景ですよね。あるいは海からの風が、斜面や、崖、丘に当たって上昇気流ができるので、それに乗って流れているんですよね。あととこどろ上昇気流が起きる場所があつてそういう所では旋回しながら、どこまでもどこまでも、あがっていくワシも見られます。そして、高く上がつたら重力に従つて落ちていく。落ちていくって言っても、長い距離をずっと、羽ばたかないで飛んでいく、省エネなんですね。そんなことで移動していると思います。ありがとうございます。

他に補足事項のある方いますか？大丈夫ですか？では、次の質問です。ボランティアで何か役に立ちたいということで、そういう情報はどこかで探せますかということです。ボランティアに関する室温ここれは動物園でいかがですか？じゃ藤本さん釧路動物園、どうぞお願ひします。今回の趣旨が違うのか分かりませんけど、動物園ではボランティアは募集してはいるんですけど、園内の活動に限定してる所なので、今回の野生だと保全だとというところは？保全であるならシマフクロウの魚道作りなんかは市民の方とやられてたんじやないかと。私自身が、そういうのを全部把握してなくて申し訳ないんですけど、本当にいろんな方に協力していただきながら魚道作りをしているというのもあるかもしれませんし、今度何かいつどうというのはまだ全然決まってない状況だったんですけれどもボランティアやってる話では、環境省という話では無いんですけども中川さんにもお話を聞きたいなと思っていて、その調査グループで多くの方々に協力いただきながら、調査をしているというお話を聞いたと思いますけど、その地域の方に協力いただけたということについては、どういう風にお考えですか？今ボランティアの話があつて、グループで調査を長年されているかと思うのですが、地域の方にボランティアの協力をいただく場合は募集されてたりするのでしょうか？皆さんボランティアで参加されていまして、そして各地域の中心になってる方がいらっしゃるので、そういう風に声を掛けていただくと大歓迎しますので、長年やってるので最初やってる人がいるんですよ、すごくもう年配になってきたり、だんだん若い人にも、参加していただきたいので、そうやっていただければなと思います。それからワシを見上げたりするというのは最初は難しいかもしれませんけれども、分かる人と、一緒にやるとすぐにオジロワシとオオワシの違いとか、生態の違いも分かるようになりますんで、記録の仕方とかも分かるようになるので、是非、参加いただければと思います。はい、ありがとうございます。

参考になれば幸いです。それではフロアから挙手して構いませんので、これは質問したいということがありましたらお願ひします。釧路市在住の〇〇と申します。今日は貴重なお話をありがとうございます。羅臼の方でももちろんのですが、先週はシラルトロ湖のほうでオオワシ、オジロワシもたくさん見ていました。そういう時にオオワシとオジロワシが仲良く並んで座ってる所がよく見受けられるんですけども、あれは本当に仲が良いんでしょうか。それともいやいや一緒に

いるんでしょうか。餌の取り合いなどは種は関係なく強い方が襲っていて自分が強いと思ったら譲らないしもうダメと思ったらさっさと餌を離して逃げるという姿は見られますけれども、それはオオワシとオジロワシって関係なく行われてるよう見えます。でも、ジーっと座って顔を合わせたりとかそういうのはオジロワシとオオワシって種が違うのでそれ、どういう気持ちでいるのかなという事が不思議。円山動物園菊池です。オジロワシとオオワシは動物園でもオジロワシとオオワシは一緒に飼えるとされているんですね。なので種によっては排他行動がすごくて自分のテリトリーに入ってきたら強烈に追い払うような種もいたりするんですけど、オジロワシとオオワシは特に種が違うからといって凄く追い払う、個体の相性にもよると思うんですけど、というのがないので一緒に近くにいたところで、特に向こうが攻撃してこなければこっちも攻撃しないというような感じなように見えます。野生でも多分そんな感じなんじゃないか、と思うんですけど、どう思いますか？猛禽類医学研究所、渡辺です。釧路湿原野生生物保護センターでは、終生飼育個体として野生に帰ることができないオオワシ、オジロワシ、やはり種別に管理しているケースもあれば、同居しているオオワシとオジロワシ同じような環境で、飼っているようなケースもあります。そこでも異種間、種を超えたラブというのはあるようないような、そつと見守るのがいいかなと思うんですが、個体の性格に一番よるのかなというところで、許容する余裕があればそばにいてもいい、絶対パーソナルスペース入ってくれると主張する個体もいると思いますし、でもそういう寄り添ってる姿というのは見ていてやっぱり、微笑ましく、是非皆さんも温かい目で見守っていただければ良いかなと思います。はい、ありがとうございます。

他に質問のある方いらっしゃいますか？風力発電の風車に猛禽類がぶつかって影響があるというのを先程見せてもらったんですけれども、ここ釧路で今太陽光発電がかなり多くて色々話題になってるんですけども、太陽光パネルが特に猛禽類に対する影響というのはあるものなんでしょうか。すいません。私の方で少し、お話をさせていただきます。今日引いてくださった方の中でもチュウヒというものがあれば、太陽光発電の所も影響事例として紹介しようかなと思ってたんですけども、バードストライクと呼ばれるような直接的な衝突というのは太陽光パネルでは発生しないとは考えています。ただ、オジロワシが幼鳥、巣立った後も自分ですぐご飯を食べれるわけではなく、お母さんお父さんからご飯をもらって飛ぶ練習しながら徐々に独立して、親の後を追って自分で練習してという期間がある間は、親を待って、餌をねだる。その間、太陽光のパネルの海の中潜り込んでしまって親が見つけられないというような短時間でも見つけられな

いというのは事例というのは、直接観測できたわけではないんですけども、発信機つけた個体等でやっぱりウロウロしててもしかしたらというような事例であったり、まそういうこともあるであろうとは想定しています。何より、直接的な体の被害というよりかは生息地消失と呼ばれるような本来のそこを餌場としていたもしくは、その太陽光が作られる過程で道路とか改変区域というのが幅広くなってしまうので、餌場であった、巣の近くであったというところの影響の方が大きいかなとは感じています。特にオジロワシという所はそこが影響あるでしょうし、チュウヒに関しても、そこ餌場として利用していたのが太陽光に変わってしまったという所が影響大きいとは考えています。よろしいでしょうか？では、他に質問があったらお願いします。今日は色々ありがとうございました。楽しかったです。雑な話になりますけども、なつくということあるんでしょうか。長い間治療してもらって、先生方とか治していただいた方に何か愛情みたいなのが出てくるんでしょうか。猛禽類の方。私から答えます。猛禽類は基本的に人にはなつきません。環境に慣れて、最初はバタバタしてたのが落ち着いてくるということはあるんですけども、人に、なつくということはないんです。あと1つあるのは小さい雛のうちに拾われて人にすり込まれちゃう、人が繁殖相手だと思ったり、人が親だと思い込んでしまうと、なついてる、親に対する行動のような行動が人に対して起こることもあるんですけども、基本的に猛禽類は人にはなつきません。私も毎日餌を愛情を込めて与えてますけれども全然なつかれていません。治療中の場合、ワシどうですか？凄い衰弱してたりするとすり込みで人についてしまうこととかもあったりしそうだなと思ってんですけど、どうですか？ありがとうございます。やはり許容するというような形の行動として、なれる、許容してくれるという意味でのなれというのを若い個体の方が、あるなとは思います。特に餌くれるイコール良い人という風な形のインプリントになりがちなので、野生に返すことに関しては、極力慣れてしまうとあとから自活できないということで、こちらも心を鬼にして、人に慣らさない。人はあくまでも怖いものだということで、お互いの距離感を保つという形を大事にしています。ただ、終生飼育個体でかつ、うちに今嘴が無い個体であったり、足がない子であったりという子もいまして、定期的なケアが必要になってくると、逆にそれがストレスになってしまふ子に関してはできるだけある意味人にたいして許容してもらうという時間を設けるようにして、呼びかけであったり、餌であったり、条件付けをすることで。これに対しては、悪意じゃないんだ、いやじゃないんだって、ここに手に乗ってもらうとか、台に乗ってもらうというようなところを練習していくということはやっていきます。ただ、そこも個体の出方を常に見てっていう感じで。そういう意味では、ワシやタカの方がやっぱり警戒心は常に強いなと感じますし、フクロウ類の方が、ちょっと猫っぽいような性格かなって感じる所、種の違いかもあったりするのですが、そこでの扱いの差は、テクニックだったりするかもしれません。補足で、スライドに出てきたチョウゲンボウという種類のヒナの時に保護されて、腕に止まらせて、筋トレさせてということやったんですけど、あれはやっぱり最初に人が近づいてもびっくりしちゃうので、少しだけ体重を下げる。下げすぎるとガリガリになっちゃうので、人間は怖いけど、でも餌も食べたいなという微妙な所について、人間怖いけど、餌食べたいなという時に人の手だけ許容を取ってもらって、手から地面、地面から手ということで筋トレ筋させますけれども、放

す時には逆に今度は腹パンパンに食べさせるんですよね。食べさせて筋肉を貯金、たくさんつけて放すんですけど、お腹いっぱいな状態にすると今度は完全に人を許容しなくなる、野生の鷹と同じ状態にしてパンパンにさせて放すという風にすると、また餌貰いに戻ってきたりということはないですね。はい、ありがとうございます。では、他はどうでしょうか。よろしいですか。ではそろそろ時間になりますので質問コーナーこの辺で終わりにしたいと思います。では閉会の言葉をいただきたいと思います。お願いします。はい、今日は、こんなにたくさんの皆様にお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。希少猛禽類、これから保全していく必要がありますが、今日発表していただいたような専門家の皆さんだけで無く、一般の皆さんも、多くの方が関心を持って知っていただくということが大切なと思っております。そして円山動物園でも猛禽類の保全活動もこれから進めていきたいと思ってますので、札幌にお越しの際は是非動物園にお越しいただいて、正門入ったらすぐに、シマフクロウ、オオワシ、オジロワシいますので、会いに来ていただければと思います。それでは今日は長々ありがとうございました。